

時空の漂泊

(二〇〇五年十月七日 第二十号)

高橋 滋

広島便り8——建具の製作

梅雨つゆというのは六月頃、日本の周囲の高気圧が拮抗し、その前線が停滞するため降る長雨ながあめのことを言うのだが、今年の梅雨つゆは「降れば土砂降り」という変わったタイプだった。

前線の動きが活発で、一気に北上したり、南下したりした。前線が移動する真下の地域は記録的な集中豪雨となり、それ以外の地域は梅雨つゆの時期だというのに雨がまったく降らず快晴の日々が続き、水源が枯渇こかつするという気象だった。

広島は、六月はほとんど雨が降らな

かった。六月だけでなく小屋の製作をはじめた三月から雨で土日の外仕事ができなかったのはたったの三日しかなかった。今年前半は、作業をするのには非常に天候に恵まれた。

雨に悩まされたのは七月に入ってからだ。七月二日に床の二回目の塗装を終えたが、その日は朝から強い雨だった。しかし、仕上げておかないと次へ進めないなので、強い雨の中を無理して作業場に行った。

そして予定通りに床の二回目の塗装を終えて安堵あんどし、帰りには近くにあり四方を山に囲まれた小瀬川畔の閑寂かんじやくな「岩倉温泉」(廿日市市津田はつかいちしつた)に立ち寄り、一日の作業の汗を流し、くつろいで、これから先の工程に思いを巡めぐらせた。



すでに四月に購入した材料はほとんど使い切り、次の外壁工事の材料に何を使うか思案していたからだ。

外壁には木材を使うことは決めていた。境界線に近づけて建てる場合は、壁を準防火構造にする必要がある、部分的に鋼板を使うことも検討したが、境界線から三メートル離し、外壁に木材を使うことにした。

しかし、「外壁用」と謳うたう木材は建

材屋には置かれておらず、カタログを見て取り寄せるしかなかった。しかも、取り寄せても建設地まで運んでもらう段取りが必要になる。ともかく厄介である。さらに、その板を縦に使うか、横に使うかも決めかねていた。

ところが、温泉に入っていたら、全体の姿が見えてきて、これで行こうと思いが定まった。心身ともにさっぱりして後半戦を迎えることになった。

窓工事

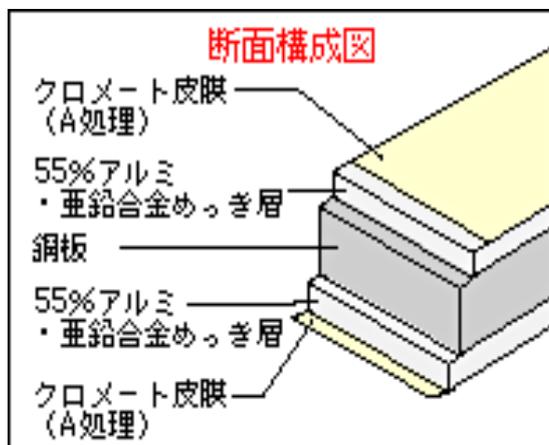
窓は自作することにした。アメリカには木造窓の専門業者が数多くあり、様々なものが流通している。日本にも輸入され、大手サッシメーカーの製品ラインナップに加わっているが、がっちり大きく重く、手作りの小屋にはどうもしっくりしない。

ログハウス用の特殊な窓を作って国内メーカーもあるが、趣味の世界の商品のようで触手が伸びない。それで自分で作ろうと決めたのである。

ところで、外壁工事は、通常、構造物の上にアスファルトフェルトなどの防水紙を貼り、サッシや換気扇などを取り付け、本体との境目を防水テープで防水し、その後、サイディングという窯業系（セラミック）ないし金属製の外壁を取り付けるという手順で行われる。

余談だが、建材屋で、もうブリキ（錫メッキ鋼板）はありません、と笑われた。今使われているのは「ガルバリウム鋼板」というものである。アルミニウム・亜鉛合金をメッキした鋼板で、何と二十年保証を謳っている。ブリキ

の数倍の耐久性があるという。すごい自信である。



最初は、まず入口や窓の外枠を作り、早めに外壁作業に入ることを予定していた。七月末まで外観を完成させていた。それから、ゆつくりと建具を考^{たて}えて製作する^{たて}という段取りにしていた。建具にはかなりの時間が掛かると想定したからだ。

しかし、本体枠組の建設途中で、窓は外枠と可動部分（障子）^{しょうじ}が一体であり、外枠だけを先行して製作するのは難しいと気がついた。スライド式なら

レール部分の加工があるし、開き方式ならば、ヒンジの受け部分の削りこみなどをしておかなければならない。

そんなことが分かったもので、ロフト^{はしご}に上がる梯子を作った後、改めて窓について検討することにした。

窓の開き方やロックの考え方を定め、市内で金具を探しては、現場で確認する。何度も市内と現場を往復し、ようやく金具を決め、窓の基本を決め、それを基に外枠をどうするかを決めることができた。

窓は、バスの窓のような押し上げ型にし、窓外枠の下框^{したかまち}を五度傾け、排水させる構造にした。

入口工事

入口も大きな仕事である。小屋の計画段階で、もつとも時間を使ったのは、入口構造の検討だったと思う。

開口部はできるだけ大きくし、フロア面が外へ向かって面^{つらいち}で広がる形式を構想した。埃^{ほこり}の出る木工作業を外（ウッドデッキ）でやれるように、またウッドデッキでの食事などのアウトドア活動が室内にスムーズにつながるようにという考えからである。

以前、タキイの「園芸新知識」で紹介されていたL字型の小屋の平面形

状も頭にあった。開口部を通して、内と外が一体につながるという考えである。

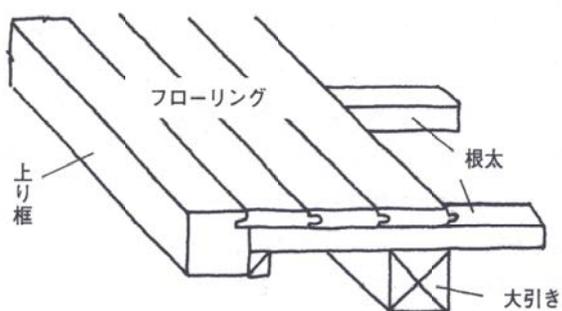
「フロア面にレールのような障害がない構造」をあれこれと考えて、結局「外付け・上吊り^{うえつ}タイプの引き戸」に行きついた。

外壁面にアルミニウムのレールを取り付け、引き戸を吊り^つ下げる。「雨^{あま}仕舞い^{じま}」は不完全になるが、引き戸はスペースの活用という点で優れており、水はいずれにしても完全には防げないと覚悟して、この方式に決めた。「雨仕舞い^{あまじま}」は入口につながるウッドデッキを工夫することによって障害を少なくすることにした。

Loft 屋根裏部屋。
框（かまち）窓、障子、扉など周囲の枠をいう。

建物の内へ雨水が浸入するのを防ぐこと。また、その施工方法。

幸い、インターネット上の検索で、「外付け・上吊り^{うえつ}タイプの引き戸」用の戸車とレールを見付けることができた。アトムリビングテックという会社の製品で、親切に相談に応じてくれ、部品図も手に入り、それを基に入口の設計を完了することができた。



玄関や勝手口の上がり口に取り付ける横木、あるいは化粧材のこと。
亜寒帯針葉樹林に生育するスプルース (Spruce: エゾ松)、パイン (Pine: 松)、ファー (Fir: ヤマの

やや細かい話だが、ウッドデッキから室内に入る床面を面^{つらいち}に平らに（掃き出し式に）するのは思いのほか面倒だった。入口の下枠^{したわく}「上がり框^{かまち}」と床面を一体で工作する必要がある。

そのため、まず「上がり框^{かまち}」の部分には「SPF」では頼りないので、ここは「レッドシーダー」(red cedar)とし、床張り前に本体枠組に組み込まなければならなかった。

外枠の加工・取り付け、入口の框^{かまち}の残り部分の加工を行い、必要な塗装も行い、その上で防水紙を貼って、見た目にも変化が出てきたのは、八月も中旬であった。

木)の総称。いずれも成長が早く安価で、主にツーバイフォー住宅の構造材として使用されている。米杉、カナダ杉とも言われる。伸縮性が少なく、割れや反りが生じにくい耐久性の優れた木材。

窓枠はシリコン・コーキングで本体と密着させ、その上にアスファルト防水紙を貼り、さらに枠との隙間^{すきま}を防水テープで防御した。



コーキング (caulking)：窓枠の周囲、部材の接ぎ目などの小さいすき間にバテ状の充填材を詰めること。また、その充填材。

しかし、こうした防水対策はまったくの我流であり、シリコン・コーキングと木材の相性は大丈夫なのか、それでどの程度まで防水できるのか、あるいは防水テープにどの程度の耐久性があるのかなど正直なところ自信がない。

建具の製作

そして、いよいよ建具の製作に入った。大物は「外付け・上吊りタイプうえつの引き戸」である。作業を始めたなら、デザイン要素にも気を配らなくてはならず、本当に手間取った。

例えば、引き戸の窓(明り取り)の位置(高さ)にしても、図面は書いたのだが、実際に材料(戸枠の厚さと幅)、構造、ガラスのはめ方(納め方)を検討し、モデルを作り壁に立て掛け、そ

の具合を眺めて最終的に固めたものは、当初の図面とはかなり違うものになってしまった。バランスというものは、どんなものでもなかなか難しいということを改めて思い知らされた。



ところで、改めて言う必要がないのだが、建具は家具の範疇はんちゆうに入る。そして家具の範疇になると、要求される工作精度はまったく違ってくる。

本体の枠組みでは〇・五ミリの誤差が許容範囲である。それでも窓の外枠を製作した時には、小屋本体との隙間すきまが〇・五ミリだと、水が沁み込んできそうな感じを払拭できなかった。何とかして「ゼロスキ」(密着状態)にしたいという方向に気持ちが傾いた。

ところが、家具の場合、突合せつきあわのスキはなく、引き出しなどの最後の調整はカンナ一削り(二〇〜三〇ミクロン)である。寸法やデザインに加えて、建具の製作には、こうした精度への引っ掛かりがあつて時間を費やした。

出窓工事

さらに急遽、「出窓」に変更するという寄り道も加わった。「構造はできるだけ簡単に」が当初の基本方針だった。片流れにしたのも「屋根の仕事が楽」という狙いがあったからだ。

ところが、途中で「出窓」に変更しなくなった。床を張り終えて、一番大きな窓に手を置いて外を眺めた時、突然、「ここに出窓が欲しい」と思った。南向きで、冬は一等地になる場所だ。ここに温室のような窓があれば、冬も楽しめるはずだと思った。

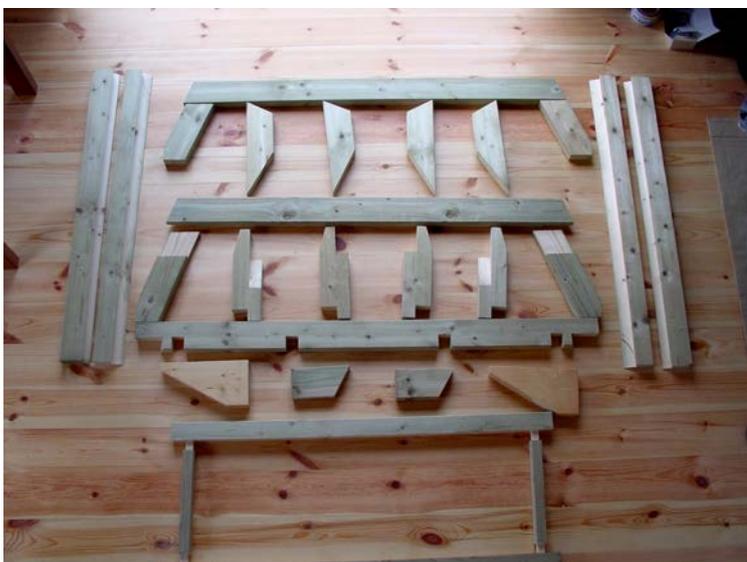
しかし、「出窓」は「天窓」に負けず劣らず家を傷める。十年ほど住んだ住宅公団の中層住宅でも、「出窓」の痛みが問題になった。露結が半端ではなく、接合部が腐った。

そんな問題があることは承知していたのが、それでも「出窓」がある家が、私の潜在的な願望であり、夢だったのだと思う。そして「問題が起きても、それも経験の一つ。後で出窓を付けるより、最初から付ける方が楽だろう」と割り切り、「出窓」にすることに踏み切ってしまった。

形が見えてくると、どうしても手直しをしたくなることが少なくない。私が高年、関わってきた自動車の世界もそうだった。

「出窓」を設けると決め、久しぶりにCADを使って部材設計を行った。設計し、必要なパーツに分解したら、何と、その部品点数は小屋本体の壁の一面に匹敵することがわかった。

小屋本体は、直線の加工で長さも同じ物が多いが、「出窓」は側面と屋根の両方に角度がついていて、加工も組み立ても本体の壁の一面よりも苦勞したように思う。



（ちなみに、椅子の足や土俵の柱が垂直ではなくて外側に開く場合を「四方転び」といって、断面の墨付け、加工は難しい仕事に属する。）

家は大きな家具

建築家の本を読んでいて、家は大きな家具であるという表現を何度か目にした。

ちなみに、すでに何度か触れている吉村順三氏が戦後日本で個人住宅の設計を始めた頃は、相応しい家具が見当たらず、結局、家具も自分自身で設計し、メーカーや職人に製作させたことがあったらしい。

家具への取り組みが深くなると、家と家具を切り離せなくなり、先に述べたような気持ちになるようだ。

一九〇八〜一九九七年。建築家。東京生れ。東京美術学校卒。東京芸大教授。合理を基調にした日本

建具を作っていると、時間を忘れてしまうことが度々だった。部材が多く加工も複雑で、集中力を失うとミスをする。勢い、時間を忘れるほど作業に集中してしまうのである。

作業場の気温は広島市内より二〜三度低い上に、林間からの風が爽やかである。それでも三十二度を越えるときさすがに汗が噴き出してくる。

八月も雨はほとんど降らず、晴天続きの中、汗を噴き出しながら時間を忘れ、休む日もなく作業を行った。何か大きな家具を際限ない時間を掛けて作っているような気がしてきた。

そして気が付いたら夏が過ぎていた。セミの合唱がいつの間にか虫の声に変わっていた。

趣味の素朴な作風で、木造住宅にも佳作が多い。奈良国立博物館の設計で芸術院賞受賞。他に軽井沢の

幸い、それまでは台風の洗礼を受けなかったが、九月に入ると本当に危なくなる。昨年、広島は五回も台風に襲われた。九月初めに西日本を直撃した台風十八号では、広島市内で風速六十メートルが記録された。



山荘など。

電気の引き込み工事の都合で八月末に外壁の一部に手をつけたが、台風が気になって、それよりも窓ガラスのはめ込みを先行させることにした。

九月四日に初めてガラスが入った。

その二日後、台風十四号が山陰沖を通過した。風は弱かったが、短時間に三五〇ミリもの雨が降った。

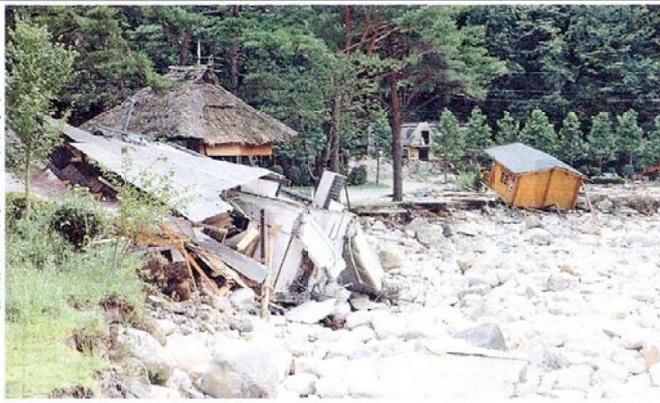
私が小屋を建てている廿日市市

佐伯地域では、川が氾濫し、六戸の家屋が流された。道路は何カ所も通行止めになった。

翌日、水浸しになった小屋を想像し、仕事を早めに終え、迂回路を通じて様子を見に出かけた。幸運にも建設途中の小屋は無事だった。雨が吹き込んだ程度で、道具類も濡れていなかった。

天窓の仮の覆いが飛ばされなくて済んだのは幸いだった。

中国新聞 平成17年10月6日 (木曜日)



台風14号から1ヵ月、今もツメ跡を残す小瀬川沿いの店舗跡(廿日市栗柄)

道路3カ所なお通行止め 廿日市 佐伯

台風14号きょう1ヵ月

安佐北 浸水家屋改修続く

県西部、豪雨災害をもたらした台風14号から六日。一月、主要道や護岸の崩落が相次いだ廿日市佐伯地域は三方所で通行止めが残り、太田川流域にある広島市安佐北区の浸水地区では家屋の改修が今なお続く。土石流が発生した宮島町は市街地の土砂の除去作業がほぼ終わり、観光も勢いを取り戻してきた。

●廿日市佐伯地域
約のお客さんに連絡できないと気を悪く、退職後、ログハウスを建て、二年前に開店した。手打ちそば店が流されたが、今は休業中だ。店主は「廃業も考えなく、かやぶきのカフェは店に補強したが、復旧工事はこれからという。経営者の岡本慶子さんは心労で入院し、二女飯原登子さんも、白糸川沿いに土石流がた安佐北区可部町井田は「紙屑類も流され、予

どうして復旧が進み、巨岩や流木が残っていない大聖院前の高橋付近の工事も今週中には終わる。大量の土砂が流れ込んだ大聖院門前の旅館は一日から飲食部等の営業を再開。宿泊も十一月再開のめどがつき、父とも一緒に経営する渡辺裕さん(妻は、二ヵ月で再開できる)とは思わなかった。来店客数は十八万九千八百人、台風18号で打撃を受けた昨年より18.9%増えている。

●安佐北区可部町
十八世帯が被害にあつた安佐北区可部町井田

かす、壁が敷けない家が目立つ。床や壁張り替え工事が始まった家もあるが、住民たちは改修費用に頭を悩ませている。床上三十センチ水に漬かった主婦香口二三さん(三十九歳)は、隣、ふすま、車など計約五百万円が利くのは百万円程度という。香口さんは「地震を考えると不安。この地区には年金生活の人も多く、大変です」と嘆く。